三輪山伝説

古事記 中巻 崇神天皇

此の天皇の御世に、疫病が盛に流行して、人民が殆ど尽きるかと思はれる程亡くなりました。天皇は深くこれを御心配遊ばされて、神祇を祭祀つて祈願を致されましたが、其の神祭りの牀に坐しました夜の御夢の中に、大物主大神が御顕れになりまして仰せられますには、「疫病の流行するのは我が心から出たことである。それゆゑ、意富多多泥古といふ者を以て我が宝前を祭り申さしめたならば、神の御祟は起ることなく、随つて国中平穏になるであらう」と斯う仰せられました。

そこで、直に早馬の使者を四方に御遣しになつて、意富多多泥古といふ人を捜し求めしめられましたところ、河内の美努村といふところで、其の人を見つけ出して、連れて参りました。天皇は、「おまへは誰の子孫か」と御問ひになりますと、「わたくしは大物主大神が陶津耳命の女の活玉依毘売を娶つて生みました子の、櫛御方命と申すものゝ子の、飯肩巣見命と申すものゝ子の、建甕槌命と申すものゝ子でございまして、わたくしは意富多多泥古でございますと申し上げました。そこで、天皇は大層御喜びになり、「これで天下も平穏になり、人民も富み栄えるであらう」と仰せられて、やがて此の意富多多泥古命を

神主として、御諸山に意富美和之大神を斎き祭らしめ給ふことゝなりました。

天皇は又、伊迦賀色許男命に命じて、多数の平瓮を作り、天神、地祇の社を定めて、鄭重に御祭を行はしめられました。又、宇陀の墨坂神に赤色の楯と矛とを奉り、大坂神に黒色の楯と矛とを奉つて、これを祭り、その他、山坂や河瀬に鎮まり坐す神々に至るまで、遺るところ無く悉くに幣帛を奉つて、鄭重に御祭を行はしめられました。それゆゑ、これに因つて、疫病がすつかり熄んで、天下はもとの通りに平穏になりました。

此の意富多多泥古といふ人を神の御子だと知つた理由は、前に云うた活玉依毘売といふ方は大層美しい婦人でありました。ところが、こゝに、其の容姿も服装も世に比類無い立派な、神神しい貴人が有りまして、一日、真夜中に、ふと訪れて来ました。両人は互に相愛して夫婦の契を結び、同棲して居るうちに、程無く活玉依毘売は身重になりました。そこで、活玉依毘売の父母は、其の妊娠いたした事を怪しみまして、「おまへは確に妊娠したやうだが、夫も無いのに、どうして妊娠したのか」と訊ねますと、活玉依毘売が答へて申すのに、「立派な殿御の御名前も存じません御方が、毎晩おいでになりまして、同棲し

て居りますうちに、かやうに身重になりましたのでございます」と申しました。

そこで、其の父母は、其の人が何人であるかを知りたく思ひまして、其の女の活玉依毘売に教へて言ひますには、「赤土を寝床の前に撒いて置き、又紡麻の糸巻の糸の端を針に通して置いて、男の来たときに、其の著衣の裾に針を刺して置きなさい」と教へました。女は教へられた通りにして置きましたが、翌朝になつて見ますと、針に著けた麻の糸は、戸の鍵穴から外に引き出されて居て、あとに遺つて居る糸は、僅に三勾だけでありました。そこで、鍵穴から出て行つたことが分りましたから、其の糸について尋ねて行きましたところが、美和山に行つて、神社の処に其の糸が留つてゐました。かやうな次第で、其の子が神の子であることが分つたのであります。又、麻の糸が三勾だけ遺つて居たのに因つて、其の地を美和と呼ぶのであります。此の意富多泥古命は、神君、鴨君の先祖であります。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『現代語訳古事記』植木直一郎 著